

2026年5月18日

第22回安全工学会総会
会長挨拶

土橋 律

会長を仰せつかっております土橋でございます。

本日は非常にご多忙のところ、第22回安全工学会総会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。また、日頃より本学会の活動にご理解とご協力を賜っておりますことに御礼申し上げます。

近年、社会の状況は大きく変化しています。例えば、大震災や非常に激しい気候変動などの自然災害も珍しいことではなくなっており、特に自然災害が産業災害を引き起こすというNATECHと呼ばれる災害は、安全工学研究の重要な対象となってきています。また、AIやデジタル技術の普及、あるいは脱炭素のための新しいエネルギーシステムの導入など、新たな対象に対する安全工学的技術も必要になっていきます。さらには、昨今のホルムズ海峡問題では、長期間備蓄している石油の緊急放出など、種々の新たな場面への対応も必要となっております。総じて安全工学やその研究の果たすべき役割はますます広がっていると考えております。

そのような中で、本学会も様々な活動を進めてまいりました。本日の総会でもご説明させていただきますが、例えば昨年の安全工学研究発表会は、やや遠方の久留米での開催にもかかわらず、ハイブリッドも駆使した結果として、281名の参加者を得まして非常に活発に行うことができました。

また、この総会の前に活動報告をしていただいた静電気災害防止研究会の継続的な講演会の実施、あるいは産業防災研究会でのNATECH等の課題への取り組み、またトップダウン型プロジェクトでのヒューマンファクターに関する研究、韓国との交流やAPSSの支援などの国際交流活動、さらに学会誌やホームページの充実などを進めてまいりました。

会員数の維持拡大や財政の安定化などが安全工学会の課題として挙げられておりますが、ひとつの対応として今年度から会費の値上げをさせていただきました。会員の皆様には非常に高い専門的知見をお持ちの方が多く、安全工学を活用して社会の安全レベルを上げるという意欲のある方々がたくさん集まっていると感じておりますので、今後とも安全工学会はこの変化する社会の安全を支える役割を担い続けることができると期待しております。

私自身は2024年の総会以来、二年間の任期が今日までとなりますが、皆様のご協力に支えられながら学会運営に関わることができました。大変ありがとうございました。

この二年の中で特に記憶に残っている点を二点、述べさせていただきます。

一つ目は韓国との交流の中で知ったことですが、韓国の大学では安全、あるいは消防といった名前のついた学科が沢山あり、39の大学でそういう学科を持っているということです。社会制度の違いもあります。日本の大学の場合は、多分五つもないと思いますので、大きな違いがあります。安全の専門家を大学という専門機関で育成するのは、非常に重要なことであり、こういったことを日本でも今後

充実できればと感じました。

二つ目は、最近理事会メンバーで実施した損害保険関係の勉強会で認識を強めたことですが、欧米では保険をかけるときに保険会社が安全コンサルティング的なことを行うのが普通になっており、それが一つのリスクコントロールとして機能しているということです。日本でも同様のことができないわけではないようですが、法律を遵守すればそれ以上のリスクコントロールにあまりコストをかけないという傾向があると思います。法律は最低限の基準ですので、この欧米的なリスクコントロール機能を参考に、個々のリスクに見合った対策をしてゆくことも、将来的課題の一つではないかと感じております。

私の感じた二点は、長期的な課題と思われませんが、少し記憶の片隅にでも置いていただければ幸いです。

今後は新しい体制の下で、本学会がさらに発展していくことを期待しております。私自身も引き続き学会活動に協力させていただきたいと考えております。本日はよろしくお願いいたします。